

「リスク減らす努力を」

お産のあり方考える

小倉北区 フォーラムに100人

出産を取り扱う産科医や施設が減少する中、お産のあり方を考えるフォーラム「安心してお産ができるまちづくり」(厚労省研究班主催、北九州市など共催)が14日、小倉北区の西日本総合展示場であった。約100人が参加し、講師の話に熱心に耳を傾けた。



北九州市で開催された市民フォーラム「安心してお産ができるまちづくり」

院に集める「集約化」の研究に取り組み、九州大病院周産母子センターの福岡恒太郎医師がコーディネーターを務めた。福岡医師が産科医不足の現状や、「出産のリスクについてあまり知らないのに結果への期待は大きい妊婦像などを説明し、助産師や大学教授ら5人が講演した。

RKB毎日放送の深見敦子記者は、リスクの高い出産にも対応できる北九州市立医療センターの高島健医師に密着し、産科医の過酷な勤務を取材したりレポートを紹介。お産にリスクはつきものということを妊婦自身が知り、体重管理などリスクを減らす努力をする必要がある」と指摘した。

高島医師は市立医療センターで昨年1年間に1300件(88%)の母体搬送を受け入れる一方、19件(12%)は満床や人出不足で受け入れられなかった現状を説明し、「産

毎日新聞朝刊
平成19年1月15日

科医を増やすためには、医師の給与や勤務時間を改善しなければならぬ」と訴えた。

会場からは「リスクの高い分娩への対応を検討する時には、産科医だけでなく小児科医や麻酔科医も含めてほしい」との要望が出たほか、分娩事故で医師に過失がなくても患者に補償金を支払う「無過失補償制度」について、「飛行機に乗る際の掛け捨て保険のようなものはできないか」などの意見が出た。

【米岡慈子】



